

profile

1968年、私立平安高校から硬式野球部での活躍をめざして京都産業大学経済学部へ入学。1971年の卒業と同時に家業(庭園資材舗)の関係から、高名な庭師であった故・小宮山博康先生に師事。その4年後に26歳で独立。取材場所となった高台寺(京都市東山区)をはじめ、数々の名刹の庭園修復や海外での日本庭園作庭を行う。愛知万博「愛・地球博」長久手会場の日本庭園では石積みを担当。



●「どのような大学生活でしたか?」  
「もつと勉強しておけば……。」と今になって思うくらい野球漬けの毎日。我々が京都産大硬式野球部の伝統や歴史を作る礎(いしずえ)になるのだという思いで4年間を過ごしました。但し私はケガや故障に泣かされ、3年次生の1年間は野球ができなかった等々、ピッチャーとしては12勝したものの、選手としては燃焼し尽くせませんでした。

●「それについて庭師の道へ?」  
企業数社から選手として誘われましたし、高校の監督にも招かれました。指導者として甲子園をめざすことは、選手として燃焼できなかっただけに魅力的でした。しかし、私は中学2年生の時に父を亡くしているのですが、その仕事(庭園資材舗)を子供の頃から見ていて自分の感性と努力で庭園を作りあげることが魅力を感じていました。それで「庭作りならいつか日本一になれるかも?」と思い、この世界に飛び込んだのです。

●「26歳での独立はかなり早いのでは……?」  
小宮山庭園創作所の故・小宮山博康先生に師事した4年間はハードで、最初の2年間は正月を入れても休みは年間20日間ほど。だから小宮山の1年は他の事業所の1年6ヶ月だと思っています。とはいえ確かに早すぎたかもしれないけれど、実際、独立当初は仕事が多かったです。

庭師  
**北山 安夫さん**  
きたやまやすお  
1971年 経済学部卒業  
第3期生

庭師として「愛・地球博」の日本庭園づくりを支えた先輩は、「我(おのれ)を抑えて我(われ)を発揮する」という自身の手法をビジネスにも通じる極意と語る。

●北山安夫さん ●インタビューア

も永く修業し、完成の域に近づいてからの独立より、自分自身が恥と汗を掻きながら我(おのれ)の世界を作りあげていくのもひとつの方法。私にはそれが向いていると思っただけです。それで「技量・感性は未知数だけど可能性を秘めている」と私に期待された人々から徐々に作庭の依頼が来るようになり、今日に至っています。

●「以来ずっと日本の庭師をめざして数々の作庭をしてこられたのですか?」

●庭作りは人間性が問われます。それは「もう手を入れよう」という最後の決断や、「もう少し手を入れよう」と進む勇気など、作庭の要諦が誰にも頼れない。「自分の世界」そのものだからです。この高台寺(取材地)やその塔頭である圓徳院の名勝庭園修復、久保田二竹美術館(1,500坪)や佐賀県・円通寺庭園(2,000坪)、平安遷都1200年記念事業の一環だった梅小路公園「十彩回廊」の作庭などでも同様でした。もちろん、それらは「北山安夫の感性・夢」の可能性に賭けてくれた人々のおかげであり、感謝の念は尽きません。

●「愛・地球博」の日本庭園ではどのような仕事を担われたのですか?」

●長久手会場「森林体験ゾーン」の日本庭園に総数4500トンの石組と茶庭を作りました。その手法は先人が古来から培ってきた知恵と業(わざ)、思いやりの心を活かしたものです。そこに住む鳥や生物の生態系を壊さないことに努めました。そのためセメントを使わない石組みによって石を留め、石積みから積こしました。池や流れも粘土で作っています。しかし、それら古来の手法は想像以上に大変な作業であり、万博の日本庭園の良し悪しが自分の肩にかかっていることや「開期までにできあがらなかつたら……。」というプレッシャーは4500トンの石より重いものでした。でもそれだけに、最終的には素晴らしい充実感を味わわせてもらえました。

●「数日前に南アフリカから帰国された再々、数日後にイタリアへ出発されるのか?」

●南アフリカでは、ヨハネスバークにある個人の庭園の一部を日本庭園に作りかえています。海外での作庭は文化接点を見つけて調和させる

ことが一番大切。

●自分を主張するのではなく、その国の文化を大いに取り入れたものにしたいと常々思っています。その一例が同庭園に作ったお茶室。二畳台目で日本式に作っていますが、屋根と壁は南アフリカ様式です。イタリアへは、京都市とフィレンツェの友好姉妹都市35周年記念事業として作った庭のメンテナンスに行きます。庭の美しさはその土地の光や風、空気や空の色を映してのもの。そこに立つ人々の美意識もその土地の風土に培われたものであり、日本人と異なることも配慮しなければ、本場の意味での「庭園」とはなりません。自然や人々との調和こそ肝要な作庭は我(おのれ)を抑えて我(われ)を発揮する「仕事。後輩諸君がめざすビジネスの極意にも通じているかもしれませんね。

●「ではその「後輩諸君へ」さらなるメッセージをお願いします。」

●自然との共同作業である作庭には、予想もコントロールもできない状況に陥ることが多々。あの頃の京都産大には、いろいろな意味での「暴風雨」が吹き荒れていて(笑)、心身共に厳しく鍛えられたことが、今の私の精神的な礎(いしずえ)となっています。開学40周年を迎えた母校では、そういう暴風雨にさらされる機会は少ないだろうけど、自ら荒天をおこすほどの気概をもち、私が4年間で培った「なにがあっても、めげない「スピリット」を皆さんも身につけてほしい。私に弟子入り志願してくる学生は後を絶ちませんが、大学で鍛えられていない者はすぐに挫折。諸君の中から「さすが京都産大」と人々を唸らす、心が屈強な人が育成されることを願います。



北山さんが修復された高台寺の名勝庭園。仕事に着手された10数年前は樹木や下草が伸び放題の「森のような状態だった」とのこと。取材は観光客が途絶えた拝観時間の終了後、修復されたご本人に案内いただくという、とても贅沢なひと時でした。